

水上の音楽

城 夏子



Noten, Chorus, Ki King
Zu W. le Ann. 1/54



Hans, Garbes.
Zu Avarndorff. 1750.



Conrad, Rickman
Peter, Bortman



Wallkins, Seifert, der
Küster, Zickert, Albers

水上の音楽
城夏子

講談社

水上の音楽



昭和50年10月28日 第一刷発行

著 者 城 夏 子

発 行 者 野 間 省 一

発 行 所 株 式 会 社 講 談 社

東京都文京区音羽 2-12-21

電話東京(945)1111(大代表)

振 替 東 京 3 9 3 0

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

Natsuko Jô 1975 Printed in Japan

乱丁本・落丁本はおとりかえいたします。

定価はカバーに表示してあります。(文2)

目

次

銀灰色の小さな車

アポロン

タナグラ人形

むかしの恋

赤鼻アポロン

いつか来ること

舞台と登場人物

135 119 105 87 75 53 7

装画

東山魁夷

画集「窓」より

装幀

小高辰也

園	遊	會
黃色	い	封
み	そ	か
歳	つ	す
		月
春	風	の
	う	そ
さ	ち	な
	か	す
	ひ	び

233 223 205 185 161 147

水上の音楽

銀灰色の小さな車

——だつて、どつちかが十二、三の子供だつたとしたら、そりや困るが、六十だらうと七十だらうと、三十四だらうと五だらうと、立派な大人と大人でせう。ケチケチしなさんな。

と彼は言つたわけではない。けれど老女は、さう言つたと同じやうな顔つきで彼はわたしを時々凝視てゐるやうだ、と、いそいそするのである。

初めて老女がそのひとに出逢つたのは、六月初めのある日の、午前六時半であつた。その朝、いやに早く眼覚めすぎたのに、思ひきりよく起き上つて、窓のカーテンをよせると、外は霧の中であつた。霧に掩おほはれた真珠色の風景に、老女は

いつも胸をときめかす。

東京の家を処分して、この春老女は、この下総しもよさの林野の中にある、敷地のゆつたりした老人ホームへ移つて来た。視界の広いといふことは、雨も雪も、巷の雨や雪と異つた姿となる。ましてや霧に包まれた風景など、老女はつひぞ知らずにゐた。

手早く洗顔して、裸くるよしに届く裾長のくつろぎ服のまま、階段を駆け下りた。

視界には、庭を距てた向ふに建つて、宵々に燈火があたりを明るませる研修所の建物もなく、松の樹立ちもなく、芝生の中の花々の姿もない。ほんの、手の届く距離の樹々と花とだけ、それらしく見える。

地上ばかりでなく、空の色まで一日中のどの時刻でもない、ぼうつとした白銀色にひろがり、太陽が、全く輝きを失つた白銅色に大きくまるく填め込まれてゐる。

門を出てホームの方をふり返つても、そこには何もない。棟々はきれいに消えてしまつてゐる。

だがそれは、束の間の風景であつた。霧は波が引くやうに、誰かがカーテンをしぼりでもしたかのやうに、さあつと消えていつた。太陽が、白銅色からプラチナ色に光を帯びはじめた。

霧のカーテンを切りさくやうに、松林の下で小綬鶏こじゅけいが啼きはじめた。

人が一人、湧き出たやうに姿を現はしたのに、老女は気づいた。灰色つばいズボンをはいた男であつた。今どき珍しく、ステッキなど手にしてゐるのが、老女の注意を引いた。そのステッキの持ち方が、瀟洒な形でなく、わし掴みだと、ひと眼で解り、すると、「犬をつれた奥さん」といふロシアのおしゃれな小説の題が、浮かんた。ステッキを持つた……さて何と言はうか。と興味をおぼえた老女の表情を、相手が捕へたのか、声がかかつた。

——太陽がメダルみたいですね。

——ほんとに。

——失礼しました。また……

どうしてまたなんだらう。心安げにと、老女は可笑しかつた。

ステッキをわし掴みにして老女の出て来たホームの門を、わがもの顔にすたすた入つてゆく。老女は門をあとしして、林の中の小径を歩き出す。

ステッキを持つた男でたくさんだと、老女はきめた。もう少し奥さん的な、味のある言ひ方を考へたのだが、あつさり、男でいいと気づいた。あら、小説の題にするわけでもないのに、なんだつていいぢやないの、と老女はあれこれ考へた自分を笑つた。

いつか霧は晴れ、老女は咲き立ての色のいい薊の花を二三本折つて部屋へ戻つた。ステッキの男の姿は庭のどこにも見えなかつた。

土曜日の午後、老女は西側の窓の、ひよろ高松の八本かたまつてゐる下に、画架を立てて、脚をふん張つてゐる男の後姿を見下ろした。あら？ あのひとつ。さう言へば、と老女は気づく。画架を立ててホームの庭をいろいろな場所で描いてゐるひとを、ここへ来た時二三度見かけたことがあつた。同じひとかも知れない。この近所に住む画家なのであらうと、そこで老女の心にやうやく一つのピリオドが打たれた。

老女専用の一坪花壇に、種を蒔いた百日草が、ダリアほども大きい花を咲かせてはじめてので、老女は時々剪つて来て部屋に挿す。アメリカ種なのである。朱桃色、黄、白、水色、淡紅、橙色とすべて胡粉ゴコンの混つた色の大輪である。

その日曜日、老女は鋏を持つて階段を降りていった。

芝生の庭に出ると、この間と同じく窓の下で、画架に向つて、灰色のズボンの脚が、芝生を踏みしめて立つてゐた。花畑へゆくには、そのうしろを通り抜けるのである。通り抜けながら、何を描いてるんだらうと、さりげなく、画架を覗いた。

芝生と松とヒマラヤ杉の色彩の感じとり方——といはうか、再現のし方といはうか、そのちらと覗いた画面の、不思議な緑の変貌は、ちよつと老女を驚かせた。老女の頭の中では松は常に暗緑色で、ヒマラヤ杉は少し白つぽく光り、芝生は浅みどりから季節によつて変色する——ときめられてゐた。

画家の描く不思議な緑の間に点々と、さくらの花びらほどのピンクがさしのぞ

いてゐる。空の青の明るみ。

百日草を十本ばかり剪つて戻つてくると、人の気配を感じたのか、否、さつきも俺のうしろを通つたが、また戻つて来たのか、一度ぐらゐ敬意を表さないでは相すまないかな、向ふさんの庭なんだから、とても思つたのか、近づいた老女の方へさつと強く顔を向けた。と同時に、その顔がほころびた。

少年つばい笑顔になつた。その笑顔からしつかりした声が生れた。

——あゝ、霧の中の……

老女は無上に可笑しくなり、持つてゐた百日草をつんと突き出した。

——上げましょ。絵かきさんは百日草がお好きなんですよ。

——ほう、それはまた……

パレットを持つた方の手をのばして、腕と顎とで花を抱へこんだ。

——さよなら。

老女は駈け出した。花がバラ／＼に地上に落ちようが、知つたことではない。いいやうにするだらう。